

## 漱石とターナー「権力に挑む筆」

*Junko Higasa 2013.10.23*

ターナーの作品に「War. The Exile and the Rock Limpet 戦争—流刑者とカサ貝」と「Peace-Burial at Sea 平和—水葬」という一対の油彩画がある。

「戦争」の方は赤い色彩の中にナポレオン・ボナパルトと兵士の夜営テントのようなカサ貝が描かれているが、これはロイヤル・アカデミーの画家仲間、ナポレオンをよく描いていた激しい気性のヘイドン(Benjamin Robert Haydon)に対する揶揄とされている。対して不安を象徴する黒い色彩で描かれている「平和」の方は、ターナーの画家仲間、良き友であった穏やかなサー・デイビッド・ウィルキー(Sir David Wilkie)の水葬の模様である。これらは同じ画家同士の戦争と平和を表しているが、これと同等の意味を小説に含ませたのが、ターナーの絵を好んだ夏目漱石であると思う。『虞美人草』には赤と黒の対比が数か所ある。また「自然を写すだけでは画にならない」と語ったターナー同様「自然その物は小説にならぬ」の一節もある。画家や詩人は作品の中に揶揄を込める。漱石も小説の表ストーリーの中に社会批判を込めた。『虞美人草』はカサ貝(Limpet)＝地位にへばりつく人「戦争—マクベスの妖婆：藤尾の母」と、地位にへばりつかない人「平和—温和なハムレット＝哲学者：甲野欽吾」の一対の絵であり、自然派推奨画壇にへばりつかない漱石でもあるようだ。社会で自分を如何に生かすべきかが問題だ。